第24回『ベンチャー・カップCHIBA』

千葉市産業振興財団（千葉市中央区、松戸利一理事長）は、ビジネスプラン・アイデアコンテスト第24回『ベンチャー・カップCHIBA』の発表会を、11月20日にTKPガーデンシティ千葉（同）で開いた。ビジネスプラン部門では書類とプレゼンテーション審査を通過した５件のプランが、ビジネスアイデア部門では４件のアイデアがそれぞれ発表された。ビジネスプラン部門のグランプリには、モノベエンジニアリング（同市花見川区、物部長智社長）の「ばね式『モノMAXフィルター』装着の緊急用浄水装置」が選ばれた。

ビジネスプラン部門で５人が、ビジネスアイデア部門では４人がそれぞれ受賞した

ビジネスプラン部門

グランプリ

ばね式「モノMAXフィルター」装着の緊急用浄水装置

モノベエンジニアリング
代表取締役社長
物部 長智 氏

災害時に生活用水を造水

モノベエンジニアリングの「モノMAX緊急用浄水装置」は、災害時に生活用水を造水するもので、自社開発したバネ式フィルター「モノMAXフィルター」を搭載している。能登半島地震の際には、このバネ式フィルターによって濾過した水が、避難所で洗濯や温水シャワー、足湯などに活用されたなどの実績がある。

バネ式フィルターは、らせん状のバネのわずかな隙間に外側から流体を送り込んで濾過する。流体を逆流させれば、バネに詰まった汚れを取り除けることから、フィルターの交換は不要で、半永久的に使えるのが特徴だ。フィルターはステンレス製で、耐食性が高いため、災害時など厳しい条件下でも使用できる。

これらの特徴を生かし、災害時に井戸水や雨水、プールの水、河川・湖沼の水を濾過し、洗濯やシャワー、トイレ、風呂、食器洗い、清掃などの生活用水として供給する。

自治体と企業向けの二つのルートを構築して販売を進める。2026年に千葉県から本格的に始め、27年に首都圏、28年には全国展開する。さらに同年に海外展開に向けた市場調査もスタートする計画だ。

使用目的に応じた商品を提供するため、筐体（きょうたい）の大きさや接続部材質、フィルターの全長・数量などの仕様変更を提案する。デモ機を提供して運用方法や効果を体感できる環境も整える。物部社長は「今回の受賞を機に災害現場で活躍する浄水装置をどんどん普及させていきたい」と述べた。

奨励賞

エムエスイー 代表取締役 前野 静夫 氏

三相誘導電動機を利用した産業用機器の電源部分を顧客のニーズに合わせて製作、商用電源及び大型発電機等がなくても駆動させる事を可能にする商品の開発

蓄電池で駆動 脱炭素化にも貢献

エムエスイー（千葉市稲毛区）は、蓄電池で三相誘導電動機を駆動させる装置を開発する。蓄電池にはリチウムイオン電池（LiB）の中でも安全性が高いといわれるリン酸鉄リチウムイオン（LFP）電池を採用。太陽光発電などの再生可能エネルギーを活用し、脱炭素化にも貢献する。モーター制御に40年間、太陽光発電に20年間それぞれ取り組んできたノウハウを活用するものだ。

LFPを自社で製作した半自動スポット溶接機でモジュール化し、直流（DC）60ボルト以内のバッテリーパックを製作。数台のバッテリーパックを活用して交流（AC）200ボルトの三相電源に変換できるDC電源を製作する。この電源に改良した市販のインバーターを組み合わせ、三相交流200ボルトの誘導電動機を駆動させる。

SDGsビジネス賞

健康な時から健康を守る
ウエルネス・チェック・プラス

検査装置 精度とスピードを両立

セリッシュエフディー代表取締役
土居 洋文 氏

セリッシュエフディー（千葉市中央区）は、超高速遺伝子検査装置と自己抗体リスク検査サービスなどの開発を進める。検査装置はPCR検査の精度と抗原検査のスピードを両立したもので、新型コロナウイルスなどの感染症の場合、その場で装置に検体を装着してから結果が出るまでの時間は10―15分間と短い。検査時間は抗原検査と同程度だが、精度は抗原検査よりも高い。使用するPCR酵素は独自に開発中で、装置から反応系までを開発できるのが同社の強みだ。

自己抗体リスク検査サービスは5種類の自己抗体を測ることで、免疫の老化度と体の現状を知ることができる。

検査装置は2025年度の千葉県医療機器等開発補助金を受けており、数年後にも製品化と医薬品医療機器総合機構（PMDA）に医療機器としての申請を目指す。承認取得後は医療機関に提供する。

検査サービスは人間ドックのオプションや個人クリニックなどの医療機関を通し、個人に提供していく。

SDGsビジネス賞

水を通して安心と環境改善を促進する家庭用のe―WASH小型生成機の普及

安全への意識高い一般消費者に販売

Eプラン
専務取締役
松澤 竜輔 氏

Eプラン（千葉県船橋市、松澤民男社長）は、強アルカリイオン電解水「e―WASH」を生成する家庭用小型装置「e―hope」の普及に取り組む。同電解水の成分は99・83%の純水と0・17%のカリウム。生成過程でも酸性水と塩素ガスなどが発生しないので、免疫の老化度と体の現状を知ることができる。

一方で、強力な洗浄・除菌・消臭・防錆効果がある。これらの特徴を訴求し、人と環境への安全性に意識が高い一般消費者を中心に販売を進める。洗濯や食材の洗浄・鮮度保持、掃除、入浴、ペットケアなどの用途を想定している。

すでにワーク（加工対象物）・食材の洗浄や感染症対策などのBツーB（企業間）用は大手を中心に導入実績がある。この生産体制を活用して家庭用も自社で生産。販売と保守は大手代理店経由で体制を構築する。

さらに一般消費者への認知度を高めるため、中小企業基盤整備機構などの協力を得て、ブランディングを行う。また、さまざまなサービスオプションも企画しており、導入へのハードルを下げる。

奨励賞

千葉大学学術研究・イノベーション推進機構スタートアップ・ラボ 客員起業家 松永 博充 氏

「血糖値が気になる方へお米のおいしさそのままに」
新しい価値づくりプラットフォーム

糖質消化性調整米の事業化を検証

松永博充氏は、米のおいしさを保ちながら、食後の血糖値上昇を抑制する生もみ処理装置と、データ認証サービスを統合したIoT（モノのインターネット）型プラットフォームの提供に取り組む。

千葉大学大学院園芸学研究院の小川幸春教授の技術シーズ「生活習慣病ゼロ次予防に資する糖質消化性調整米」を事業化するものだ。事業性を検証しながら、千葉大発スタートアップの立ち上げを目指している。

健康志向が高まる中、食後の血糖値上昇を抑える処理をした生もみ（加工米）の処理条件や、工程、品質データをクラウド上に記録・可視化するデータ認証サービスを提供し、コメの高付加価値化とブランド化を支援する。次世代のコメづくりに挑戦できる事業環境を提供するもので、2028年に事業を始める計画だ。また、共創パートナーの募集も進めている。

ビジネスアイデア部門

グランプリ

PsyN（サイン） 小林 海 氏

精神・発達特性を当事者・専門家視点で理解を深める研修プログラム

奨励賞

ドウセン代表取締役 川島 愛香 氏

千葉大学学術研究・イノベーション推進機構スタートアップ・ラボ 客員起業家

千葉経済大学 Re：Read House 矢澤 智弘 氏

グランプリはPsyN（サイン）の小林海氏による人事、管理職、経営者などのマネジメント層を対象とした研修プログラムが受賞した。メンタル不調者と心理学の視点を融合することにより、短時間で効率的な学習を可能にする。

画像生成AI（人工知能）で生成したイラストと実例で、言葉だけでは伝わりにくいメンタル不調者の感情と状況を「自分ごと」として直感的に理解。これを踏まえ、自分ならどう関われるかをロールプレイで体験することにより、自信と共感を持って自然な対応を可能にする。

奨励賞に選ばれたドウセン（千葉市中央区）のサービスは、動画編集を格安で学びたい主婦と、発信できる人材がほしい企業をつなぐものだ。月額980円（消費税込み）のオンライン教材により、自宅で学習できる仕組みを提供。少量・低単価の仕事から経験を積み、ステップアップする。企業にはニーズに応じたスキルを持つ主婦をマッチング形式で紹介する。

同じく奨励賞の矢澤智弘氏によるアイデアは、ブドウを摘み取るという非日常的な体験を、医療や福祉施設などの屋内環境で安全・気軽に可能にするものだ。テーブルに設置できる鉢植えサイズのブドウを使用する。まず千葉県の社会福祉・医療法人をターゲットと想定している。ブドウ以外の作物についても検討する。

同じく奨励賞の千葉経済大学のRe：Read House によるアイデアは、社会問題となっている空き家を読書倉庫として運用するものだ。本を預かり、その本を貸し出すだけではなく、本を気に入った場合、購入交渉もできる。空き家には資格を持った休眠保育士を配置し、子ども預かったりするスペースを設置する。本だけではなく、ゲームにも対象を拡大する。